

時代を診る眼

国土交通委員会 専門員

いはら こうたろう
伊原 江太郎

今、多くの国々は程度の差こそあれ、社会経済の各局面においてこれまで経験したことのないまさに有為転変の渦中にあるものと思われる。そのなかで指導者を含む当事者はその深淵に落ち込む危険を回避すべく、己の腕の見せ所とばかりに独自の対応策を掲げ競い合っている。その態様を見ると、ダーウイン流の強いものが生き残るのではなく、環境に適応し得るもののみが生き残るという誰もが納得しかつ解り易い旗幟の下に、概ね妥当な戦略を展開しているとされている。

しかし、これらに何ら問題がないというわけではない。検討段階の想定とは異なり、実践段階においては微妙に変化する現実への対応が困難となり、不測の事態を招く等辛酸を嘗めねばならなかったことは少なくはない。その要因の一つに、今日の世界が高精度かつ高機能な要素をふんだんに含む社会構造を築き上げたことも遠因とされ、極めて微細なことさえも、一步誤れば事態暗転の引き金となりかねない脆弱とも思える特殊性を抱えていることがある。まさに一時と言えども気の抜けない社会構造の中で暮らすとなれば、改めて留意すべきは、寸分の狂いも許さない精緻なシステム構築を絶対視することによる不適応状態を引き起こす怖さであろう。

かつて国家的意思の形成において、感情的葛藤による行動・思考パターンが主導し、それが一種の熱気を帯びた社会現象となって甚大な爪痕を残した苦い経験を顧みれば、決め事に携わる場合は特に注意深く、かつ綿密に対処しなければならないことは申すまでもない。それでも社会経済分野における各種事象に係る判断ミスが生じる理由の一つに、今日の社会経済の実態に相応しい意思決定・合意形成のシステムが十分に機能しないことが考えられる。今後、更なる社会経済の開発・進展を目指す社会生活を余儀なくされる中で、多様化を求める民意を踏まえつつ意思決定・合意形成が健全なシステムとして定着し機能するためには如何なる対応が必要となるのであろうか。そこには技術論的な制度の在り方を論ずる以前に、直面する問題の本質とは何か、長期的な視点に立脚し複雑に絡み合う各課題解決に直結し得る、複眼視できる方向感覚を万人が見失わないことではないか。

このように複雑かつ高度な対応力を要する課題を抱えるなかでは、多くの国々においては国民代表機能、立法機能等の担い手として議会に対する期待は想像を超える大きなものとなっており、また、その機能強化のための補佐機構等の整備が進められてきている。その中でも国会における多種多様な議員活動に伴い派生する調査業務の補佐体制については、とりわけ確性・有効性など優れた資質の養成が喫緊のテーマとなりつつある。

これら直面する諸課題に対処する際、留意すべき点は何か。それは、①事実や背後関係にかかる洞察力、②通説・見解について評価・解析し得る力、③創意工夫を心がける誠心、④明快で簡潔な説明能力等が挙げられ、少なくとも調査業務に励む者としては、これら列挙したことについて、倦まず弛まず永きに亘り精進すること、そしてそれを成就する環境づくりに努めること以外に課題解決の打ち出の小槌の如きものはないことを肝に銘じなければならぬのであろう。

半世紀を超える調査業務の経験を有する調査室においては、業務を巡る諸情勢を踏まえ、立法補佐機構としての調査業務の価値を更に高めるためにも、今、新たなる一步を踏み出すべき時期に至っていることを痛切に感じ入るところである。